様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１８日現在

機関番号：13101
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2011
課題番号：22652003
研究課題名（和文）　空間と形に感応する媒体として身体を解明することから、知の成立機序を捉え直す試み
研究課題名（英文）　Study about organization of knowledge from the analyzing the Body, that is induced by space and figure.
研究代表者
栗原　隆（KURIHARA　TAKASHI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：30170088

研究成果の概要（和文）：
私たちの感性が身体を媒介として、外部の周囲の空間や形に感応することを通して、舞踊や演奏における即興や、風景や雰囲気への感興など、理性を通した知とはまた別の、体感に基づく知が可能になる仕組みを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：
The systematic framework in response of KANSEI to the external space and objects via one's body that allows us to obtain experience-based (but not rational) knowledge (e.g. extemporization in dancing or playing the music instruments, or fancy to scenery or atmosphere) was revealed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,000,000	0	1,000,000
2011 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,700,000	510,000	3,210,000

研究分野：哲学
科研費の分科・細目：哲学・倫理学
キーワード：感応・身体・感覚知・即興・知の成立

１．研究開始当初の背景

2008 年度から 2010 年度にかけて、科学研究費補助金(基盤研究(B))「空間における形の認知を介した『主体』の存立の基底に見る感覚の根源性についての研究」(課題番号 20320003)を受けて共同研究を展開したところ、「主体」の成り立ちの基底に「感覚」の働きがあることは明らかになったものの、「主体」という視座に立っては、必ずや「客体」との対立・相克に巻き込まれざるを得ないことも明らかになってきた。

ところが、「身体」は、舞踊や宗教儀礼における神との交感など、「身体感覚」を媒介として「身体」を超えることがあることを考えるなら、「主体」というより「身体」こそ、周囲世界に感応することを通して、その有限性から脱するデバイスであることを実証的に明らかにする必要に迫られたところから、本研究の問題意識は樹てられた。

２．研究の目的

したがって研究の目的は、身体が周囲の環

境、すなわち空間や形にどのように感応するかを実証的に明らかにするとともに、理論的には、たとえば「即興」や「感興」、「察知」や「気配り」など、理性に因らない「空気」感としての知の成り立ちを解明することが目指された。

３．研究の方法

具体的には、舞踊家である辻元が、自らのテーマをどのように演出して、その舞台や大道具、背景などに、自らの身体をどのように感応して舞うのかという、舞踊の成り立ちを素材として、「感興」や「感応」の機序を分析するという方法、さらには、宗教儀礼での踊りに、神との「交感」が成り立つ事例を分析するという方法、そこに、思想史において一元論を形成した思想から、理性と感性とを対比的に捉えるのではなく、連続的かつ包括的な関係のなかでの感性や感覚、表象の意義と役割などを抽出、それを、舞踊や宗教儀礼での実例の分析に用いるという方法で、共同研究を展開した。

４．研究成果

辻元は2010年9月29日に、東京田町の「建築会館」にて、パフォーマンス「縮む　膨らむ　歪む」を上演、仮想境界面の意識が、次々に変容させられるパフォーマンスを通して、変容する空間に感応する現場を顕現させた。また、2010年12月25日に、東京六本木「俳優座劇場」にて「WANDERING」を上演。16 枚のパネルに映し出された世界の断片を人生と見なしながら、時空を踊ることをとおして、世界の創造と破壊とを現前化させた。このパフォーマンスを軸に理論的な分析が展開された。

2010年8月20日には、新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」にて公開研究会を開催、栗原隆が、ドイツにおける表象一元論での「表象（Vorstelung）」が、イギリス経験論における「観念（idea）」の訳語であったことを明らかにすることを通して、主体の脱主体化の脈路で表象が機能することを解明した。細田あや子は、「よきサマリア人の表象」について、図像学的に明らかにした。2010年12月24～25日には、「日本ヘーゲル学会」第 12 回研究大会を招致、開催、栗原が「懐疑と感覚」を発表、感覚が主観的かつ個別的で偶然的であることから生ずる難問と、感覚が生きる場面とを明らかにした。

2011 年 9 月 3 日には公開研究会「身体と感興」を、新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」にてかいさい。栗原隆が、主体と客体との包括関係を明らかにするべく、「同一性と連続性」を発表、辻元早苗も「身体と感興」を発表、世界と融合する身体について、明らかにした。

別の経費で開催された研究会での成果も含め、一連の研究成果は、共同研究の発端となった成果とも併せ、主に，次の研究書へとまとめられて公刊された。

栗原隆・矢萩喜從郎・辻元早苗(編)『空間と形に感応する身体』(東北大学出版会、2010年、389頁)、

栗原隆(編)『共感と感応――人間学の新たな地平』(東北大学出版会、2011年、381頁)、

栗原隆(編)　『世界の感覚と生の気分』（ナカニシヤ出版、2012年、290頁）。

総じて一言で言うなら、私たちの感性が身体を媒介として、外部の周囲の空間や形に感応することを通して、舞踊や演奏における即興や、風景や雰囲気への感興など、理性を通した知とはまた別の、体感に基づく知が可能になる仕組みを明らかにすることができたと信じる。

また、ここから、かつて一時的に隆盛を見た哲学的人間学の試みにおいて、原理とされた「気分(Stimmung)」が、ややもすると、個別的で主観的かつ偶然的なものとして受け止められかねないため、やがて衰退してしまった歴史的経緯とは裏腹に、「Stimmung」は「気分」というよりまさしく「感応」であって、主観の働きが主観を超える作用をなすことが明らかにされた。これは、「感応」あるいは「表象」を介して人間と周囲世界との包括関係のなかで、人間の活動を再把握する新たな人間学の模索に繋がるスタート地点に立てたことも、大きな成果に数えいれることができよう。

さらに、理性とはまた違う、身体感覚に知の発端を見定めたことから、感覚情報を実験心理学的に分析することを介するなら、感覚こそが知であるとする感覚主義も、一定の可能性を持つことが明らかになっている今、心理学と哲学と、そして本来は「感性論」であった美学とが融合するような知の地平を展望するに至ったことも、今後につながる成果であったと信じる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 14 件）

① 細田あや子「『胎内十月の由来』と十三仏信仰」(『比較宗教思想』12 号、査読なし、2012 年、35～66 頁）

② 青柳かおる「イスラームの生命倫理における初期胚の問題――ユダヤ教、キリスト教と比較して」(『比較宗教思想』12 号、査読なし、2012 年、1～21 頁）

③ 青柳かおる「イスラームのコスモロギー――流出論をめぐって」（竹下政孝・山内

志朗（編）『イスラーム哲学とキリスト教中世Ⅲ　神秘哲学』岩波書店、査読なし、2012 年、49〜65 頁）

④ 加藤尚武「テクノ・ポピュリズムとテクノ・ファシズムの深い溝」（『中央公論』4 月号、査読なし、2012 年、42〜49 頁）

⑤ 加藤尚武「核廃棄物の時間と国家の時間」（『現代思想』40 巻 4 号、査読なし、2012 年、194〜199 頁）

⑥ 加藤尚武「環境倫理学から見たエネルギー問題」（『中央公論』9 月号、査読なし、2011 年、160〜167 頁）

⑦ 加藤尚武「正戦論の含意――ナショナリズムと帝国主義」（『プラクシス』12 巻、査読なし、2011 年、27〜46 頁）

⑧ 加藤尚武「環境倫理と生命倫理」（『神奈川大学評論』68 巻、査読なし、2011 年、35〜43 頁）

⑨ 青柳かおる「イスラームの生命倫理における胚の形成過程の問題」（『比較宗教思想研究』11 号、査読なし、2011 年、1〜16 頁）

⑩ 青柳かおる「イスラームの婚姻論比較研究――ガザーリ、イブン・アラビー、カラダーウィー」（『東洋学術研究』４９巻２号、査読あり、2010 年、105〜121 頁）

⑪ SHIRAI,N.&ICHIHARA,S.:Suppression of sensitivity to radial optic flow during locomotion.:The Japanese Journal of Psychonomic Science No.29 学会賞抄録 pp.70-80

⑫ SHIRAI,,N. & YAMAGUCHI M.K.:How do infants utilize radial optic flow for their motor actions? : A review of behavioral and neural studies.(Japanese Psychological Research No.52,査読あり pp.78-90)

⑬ 栗原隆「信念と懐疑――ヤコービによるヒュームへの論及とドイツ観念論の成立」（東北大学哲学研究会『思索』43 号、招待論文、2010 年 31〜50 頁）

⑭ 栗原隆「意識の事実と観念論の基礎付け」（日本フィヒテ協会『フィヒテ研究』18 号、査読なし、2010 年 23〜38 頁）

〔学会発表〕（計 13 件）

① 伊村知子・白井述「スリット視条件における形態と運動の統合能力の初期発達」（日本基礎心理学会第 30 回大会、2011 年 12 月 4 日、慶應義塾大学）

② 白井述・伊村知子「乳児期における移動行動の獲得に伴う運動視パタンへの視覚選好の変化」（日本基礎心理学会第 30 回大会、2011 年 12 月 4 日、慶應義塾大学）

③ 青柳かおる「スーフィズム（イスラーム神秘主義）における思想と実践」（第４回東洋哲学研究所公開講演会、2011 年 11 月 7 日、日本青年館国際ホール）

④ 青柳かおる「イスラームにおけるメッカ巡礼と聖者廟参詣」（平成 23 年度「四国遍路と世界の巡礼」研究集会、2011 年 10 月 30 日、愛媛大学）

⑤ Shirai,N. & Imura,T. 「Effect of locomotor experience on optic flow sensitivity in infancy」(34th European Conference on Visual Perception,2011 年 8 月 31 日, Toulouse,France)

⑥ 栗原隆「ヘーゲルとスピノザ――実体は、自己原因と規定的否定を経ると主体になるか」（日本ヘーゲル学会第 13 回研究大会シンポジウム、2011 年 6 月 18 日、お茶の水女子大学）

⑦ 栗原隆「実在と表象――イギリス経験論とドイツ観念論を繋ぐヤコービ」（日本ヘーゲル学会第 12 回研究大会、2010 年 12 月 25 日、新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」）

⑧ 白井述「放射運動知覚の初期発達の諸相」（応用知覚研究懇話会：「知覚と人工現実」シリーズ第一回、2010 年 12 月 16 日、九州大学）

⑨ 白井述・市原茂「自己運動は並進運動感度を抑制しない」（日本基礎心理学会第 29 回大会、2010 年 11 月 27 日、関西学院大学）

⑩ 白井述「チュートリアル招待講演：奥行き知覚の初期発達」（第 15 回日本バーチャルリアリティー学会大会、2010 年 9 月 17 日、金沢工業大学）

⑪ Shirai,N, & Ichihara,S.『Suppression of optic flow sensitivity during locomotion』33th European Conference on Visual Perception, 2010 年 8 月 24 日、EPFL(Lausanne,Switzerland)

⑫ 白井述「放射運動知覚の初期発達――なぜそのように発達するのか」（生理学研究所研究会「視知覚の理解に向けて――生理、心理物理、計算論による探求」2010 年 6 月 11 日、自然科学研究機構・岡崎コンファランスセンター）

⑬ 細田あや子「ヒルデガルト・フォン・ビンデンの救済論――ヴィルトゥスのモティーフを中心に」（ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所第三回研究会、2010 年 4 月 3 日、早稲田大学）

〔図書〕（計 12 件）

① 栗原隆（編）：（共著）加藤尚武・細田あや子・白井述・佐藤透他『世界の感覚と生の気分』（ナカニシヤ出版、2012 年、290 頁）

② 細田あや子『死生学年報 2012』（リトン、2012 年、261 頁）

③ 加藤尚武『災害論』（世界思想社、2011

年、198 頁）
④ 栗原隆（編）：（共著）佐藤透・細田あや子・加藤尚武他『共感と感応――人間学の新たな地平』（東北大学出版会、2011 年、381 頁）
⑤ 栗原隆『ドイツ観念論からヘーゲルへ』（未來社、2011 年、281 頁）
⑥ Takashi KURIHARA : Glauben und Wissen in der Geistesgeschichte (Graduate School of Modern Society and Culture, Niigata University. 2011 年, 171 頁)
⑦ 加藤尚武『入門環境倫理学』（御茶の水書房、2010 年、100 頁）
⑧ 栗原隆『現代を生きてゆくための倫理学』（ナカニシヤ出版、2010 年、302 頁）
⑨ 加藤尚武『未来を守る環境倫理学』（御茶の水書房、2010 年、94 頁）
⑩ 松田純・川村和美・渡辺義嗣（編）、加藤尚武（共著）『薬剤師のモラルジレンマ』（南山堂、2010 年、214 頁）
⑪ 久保陽一（編）：（共著）栗原隆・加藤尚武他『ヘーゲル体系の見直し』（理想社、2010 年、272 頁）
⑫ 栗原隆（編著）：（共著）加藤尚武・伊坂青司・山内志朗・鈴木光太郎（共著）『空間と形に感応する身体』（東北大学出版会、2010 年、389 頁）
⑬ 加藤尚武（共著）『変貌する哲学』（岩波書店、2009 年、293 頁）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
栗原　隆（KURIHARA TAKASHI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：30170088

(2)研究分担者
加藤　尚武（KATOU HISATAKE）
鳥取環境大学・大学院環境情報学研究科・教授
研究者番号：10011305

辻元　早苗（TUJIMOTO SANAE）
有明教育芸術短期大学・教授
研究者番号：20155378

佐藤　透（SATO TORU）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：60222014

細田　あや子（HOSODA　AYAKO）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：00323949

白井　述（SHIRAI NOBU）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：50554367

青柳　かおる（AOYAGI KAORU）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：20422496

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：